

「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果を生かした授業改善について

1 学力調査等に基づいた自校の課題の分析

◆「全国学力・学習状況調査」による分析

正答率や無解答率、解答類型、四分位の割合、過去の調査結果等に着目

令和5年度「全国学力・学習状況調査」の結果を分析

都の平均正答率と比較して、国語は2ポイント、数学は7ポイント、英語は3ポイント上回った。特に、数学において、令和3年度に課題となった問題と同様の出題の趣旨の問題を3年間経年分析したところ、都の平均正答率との差は概ね改善されたことが分かったが、引き続き指導を継続する必要があると考えられる。

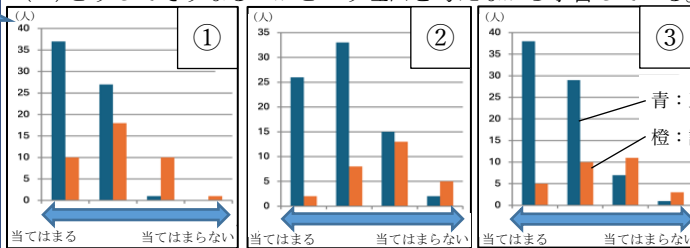
数学 問題	令和3年度 8(3)	令和4年度 7(1)	令和5年度 7(2)
出題の趣旨	データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる	データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる	複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる
正答率	11.3% (都 11.2%)	42.4% (都 47.0%)	60.6% (都 36.5%)
都との差	+0.1ポイント	-4.6ポイント	+24.1ポイント

◆「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の効果的な分析方法の開発・実践（ア）

学習の進め方や指導方法に着目

「全国学力・学習状況調査」との相関関係を分析

国・数・英のそれぞれの問題について、最も相関が強いものを抽出すると次のようになった。①「国2二_都9(2)分かっていることと求めることを考えて問題に取り組んでいる。」②「数6(2)_都4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。」③「英7(1)_都4(14) どうしてそうなるのかという理由を考えながら学習している。」



児童・生徒の学び方等を分析

以下の手順において、授業で重点的に取り組む項目を決定した。
① 国調査の各教科の結果からS-P表を確認し、課題がある問題を抽出
② ①に正答した生徒と誤答した生徒について、都調査項目の肯定的な回答の割合が20ポイント以上差があるもの（15項目）を抽出
また、国調査や校内の定期考査等で正答率が上がっている生徒に対して、学習の進め方について聞き取り調査を行ったところ、より効果的に学習内容を身に付けるために学習方法を工夫し、その工夫を自らが自覚していることが分かった。さらに、意義を理解して家庭学習を行っていることが分かった。

児童・生徒と教師との意識の差を分析

都12(5)「授業では、自分が理解したことや考えたことを他の人や先生に説明する時間があると思う。」の教師と生徒の意識の差について、令和3年度は26.9ポイントあったが、令和5年度は5.4ポイントとなり、差が縮まった。

2 課題の解決に向けた手だての明確化

学校全体で重点化や焦点化する内容を決定

◆解決すべき課題の明確化

国調査と都調査の分析から、令和3年度に課題として着目した点について、一定程度改善が見られるものの、理由を考えながら学習することや、他者と関わり合いながら学習することなどについて、依然課題が見られることから、引き続き以下の指導を継続する必要性がある。
○ 授業で重点的に取り組む15項目（以下、「重点15項目」とする）を意識した指導
○ 生徒の学習状況を適切に把握し、実態に合った効果的な指導

◆課題の解決に向けた手だての決定

○ 「重点15項目」を意識した授業を行い、検証・協議することで、どうしてそうなるのかという理由を考えながら学習し、根拠を明確にして説明ができ、他者と関わり合いながら考えを評価・改善していけるような生徒の育成を図る。

3(5)「学校の学習で人に負けたくないから。」	4(2)「難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。」	4(9)「他の人と意見がちがったときは、質問をして相手の考えを確かめている。」	4(14)「どうしてそうなるのかという理由を考えながら学習している。」	6(2)「他の人の話を聞くときは、メモを取って理解するようにしている。」
7(3)「まちがえた計算問題は、どこでまちがえたのかを考えている。」	8(1)「数学で学習する言葉や公式は、見ないでも言えるようにしている。」	8(2)「数学で学習する言葉や公式の意味を理解しようとしている。」	9(1)「前に同じような問題をやったことがあるかや、今まで学習した問題とどこがちがうのかを考えている。」	9(2)「分かっていることと求めることを考えて問題に取り組んでいる。」
9(3)「問題文の内容を図や表、グラフに表して考えている。」	9(5)「まちがえた文章問題は、どこでまちがえたのかを考えている。」	10(3)「教科書を読むなどして、授業でこれから学習することの見通しをもつようにしている。」	10(5)「教科書やドリルの問題に取り組むなどして、学習したことを確実にできるようにしている。」	12(2)「授業では、問題や活動に取り組んで『できた』『分かった』と感じることが多いと思う。」

○ 「重点15項目」を取り入れた振り返りシートを活用することで、生徒の学習状況を把握する。

3 手だての実践と検証

◆授業改善の実現に向けた組織的なOJT推進の実践事例の開発（イ）

〈検証授業の実施〉

「重点15項目」に対する各教科の手だてを、授業観察の視点として協議を行う。

(例) 授業における生徒間の交流活動を増やす。

→正答を求めるだけでなく、その理由や正答に至る過程を説明し合う機会を設定できていたか。
〔特に関連する項目：4(9)、4(14)〕

(例) ICT機器やホワイトボードの活用

→思考の可視化及び個人⇒グループ⇒全体につなげる情報の共有化がされていたか。
〔特に関連する項目：9(2)、9(3)〕

【成果】各教員が本校の生徒の課題を認識することで、組織として方向性が統一され、より効果的に資質・能力の育成を目指した授業づくりにつながった。

〈検証授業の成果と課題を踏まえた組織的な授業改善OJTの実施〉

研究の組織体制【3分科会（班）】

- データ分析班
国調査や定期考査と都調査及び自校独自の意識調査を分析し、生徒の学習の進め方の傾向を他分科会に提示する。
- 指導方法の開発班
自己調整を図りながら粘り強く学習に取り組む力を向上させるための指導方法を全体に共有する。
- 家庭学習・補充学習方法の開発班
家庭学習ノートの活用方法を開発し、家庭学習と学力の関係性を見取る。

◆児童・生徒一人一人の学びに向かう力等を育む指導方法の開発・実践（ウ）

- 「重点15項目」のうち、取り組めるものを意図的・計画的に授業で実施する。
- 「重点15項目」に着目した振り返りシートを活用する。
- 授業内で学習した内容を意図的・計画的にアウトプットする場面を設定する。

◆効果的な家庭学習の指導事例の開発（エ）

家庭学習計画「ちりつも」を活用して、生徒一人一人が毎日の学習計画及び学習記録を記載する。週に一回程度、朝学活の時間を活用し、班内で各生徒が取組を発表し共有する。反省及び参考となる取組は「ちりつも」に記載する。